

黒人研究の会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.69 (June 27,2009)

第69号 2009年6月27日

例会発表要旨

特別例会 2008年12月13日 キャンパスプラザ京都

特別企画<シンポジウム:アメリカ黒人とキリスト教>プログラム

シンポジウム趣旨説明……………山下 弥生(大阪大学・院)

講演:「アメリカ黒人とキリスト教」……………梶原 寿(日本 M・L・キング研究会幹事、
金城学院大学非常勤講師)

発表1「19世紀黒人女性説教者の自伝における聖書解釈の多様性」……………山下
弥生(大阪大学・院)

発表2「キング牧師のキリスト教理解と公民権運動——STRENGTH TO LOVEを
読む」…加藤 恒彦(立命館大学)

コメント・質疑応答

コメント……………北島 義信(本会代表、四日市大学)

自由質疑

(司会:古川哲史、大谷大学)

講演「アメリカ黒人とキリスト教」(梶原 寿氏)要旨とシンポジウム全体の報告

アメリカにおける黒人の宗教体験は彼らの文化やアイデンティティの形成に大きな影響を与えた。なかでも黒人とキリスト教はそれぞれの時代にアメリカ社会と深くかかわりながら独特な形態で独自の役割を果たしてきた。この「アメリカ黒人とキリスト教」をより広範に理解するためにキング牧師および黒人キリスト教が専門である宗教学者、梶原寿氏を招きシンポジウムを開催した。

梶原氏は「アメリカ黒人とキリスト教—特にキング牧師に焦点をあてて」と題し、バラク・オバマ氏のアメリカ大統領当選は「奇跡的出来事」であり、「歴史における復活の出来事」であることから話を始められた。そのあと、黒人キリスト教と白人キリスト教は実存の相違が根本的に違っていたことをジェームス・H・コーンの理論やモンゴメリー・バス・ボイコット運動時におけるキング牧師の福音理解などを例にあげて説明された。さらに黒人キリスト教の神学的姿勢が総合論的である点について言及され、梶原氏がずっと指摘されているキング牧師を根底から支えたとする「贖罪信仰」(faith of redemption)について説明された。この、「不当に受ける苦難には贖罪のはたらきがある」という「贖罪信仰」についてはその理解があとの質疑応答のとき議論となった。最後にキング牧師の公生涯を三つの時期に分けられそのそれぞれの時代において彼が黒人のキリスト教の実践者であったことを述べられた。

コメント、質疑応答においては宗教における普遍的な部分、キング牧師の非暴力および悪に関する解釈とその思想的背景、「犠牲死」の理解などについて議論がかわされた。なかでも、筆者が印象的だったのは「公民権運動のときに白人教会はなぜ黒人教会を助けなかったのか」という質問であった。梶原氏は黒人と白人がアメリカに入ってきたときからの根本的な実存の相違を強調しそれがひとつの理由であろう、と答えられた。それに加えて、加藤氏が注目したキリスト教の中心的テーマでもある「愛」に注目するならば、アメリカ社会において常に優位の立場に立ち自己の利害に絡んでしまった白人教会はキリスト教本来の愛の精神から逸脱してしまいその活動もゆがんだものになってしまったのではないだろうか。

今回のシンポジウムでは宗教という切り口の性格上、学問的な内容に加えて愛や倫理観などにも触れることとなった。黒人研究をするにあたり、それらがたいせつなことからであることを再認識できたことは有意義であった。

(文責 山下 弥生)

19世紀黒人女性説教者の自伝における聖書解釈の多様性

山下 弥生

Jarena Lee、Julia A. Foote、Rebecca C. Jacksonの3名の自伝をとりあげ、それらの自伝のなかで彼女たちが「自由に」聖書や神を解釈していたことを紹介した。そして、それらの自由で多様な解釈が意味するものは、黒人のキリスト教は（白人とは根本的に違って）生存と解放のための信仰であったこと、そこにはアフリカ起源の宗教とキリスト教が混ざっていき過程がはっきりとあらわれており、それらには共通してジェームス・H・コーンのいう黒人宗教思想が根底にある、ということを示した。

キング牧師のキリスト教理解と公民権運動——STRENGTH TO LOVEを読む

加藤 恒彦

本発表は、オバマ大統領実現の歴史的・直接の前提となった公民権運動の指導的理念として非暴力直接行動の理念・戦術を提唱したキング牧師の説教集The Strength to Loveについて論じた。論点としては、キングの牧師のキリスト教徒としての意義の重要性、それが生まれた背景をどう理解するのか、また、説教集としてバラバラに話されていることのなかに一種の体系性が見られること、またどのようにキリスト教が社会変換の理論として機能しているのかを検証すること等であった。

1月例会 2009年1月24日 キャンパスプラザ京都

<オバマ新大統領誕生の背景と意義を考える>プログラム

—— 第55回全国大会(6月27日-28日)に向けての企画 ——

話題提供1:「William J. Wilson, The Declining Significance of Race 紹介」……加藤恒彦(立命館大学)

話題提供2:「オバマ演説の紹介」

William J. Wilson, The Declining Significance of Race 紹介

加藤 恒彦

ウイルソンはアファーマティブ・アクション以降の黒人の中産階級層と都会のスラムに取り残された貧困層への二極化の傾向を正面からとらえ奴隷制度以来の差別の蓄積やいまだ残る差別という説明原理をもはや現実を十分に説明できるものではないとし、黒人中産階級の形成過程を30年代のニューディール時代のリベラルな労働政策やCIOの結成と基幹産業労働組合への加入促進運動やアファーマティブ・アクションによる労働市場への積極的な教育のある黒人層の参入促進に求める。他方、黒人の貧困層にとって50年代以降のアメリカ産業の構造変化(①産業・工場の都市から郊外への移動、新規産業の郊外立地、②製造業からサービス産業への産業構造の大きな変化、技術革新に依存した大企業の役割の増大)の全てが教育を受けていない黒人層、とりわけ若年層に深刻な打撃を与えたと主張している。つまりそしてそれを解決するためには経済全体の活性化や新規成長産業の開発や狭く人種に限られた救済政策ではなく、国民全体が賛成できる「普遍的救済策」が必要であると主張している。これはオバマ大統領がやろうとしている方向と基本的に一致している。

2月例会 2009年2月28日 大阪工業大学

Quicksand(1928)に見られるNella Larsenのアメリカ社会に対するレジスタンス

船田 麻衣子

Deborah McDowellは、ハーレム・ルネッサンス期に活躍したNella Larsenを「ハーレム・ルネッサンス期の文学史の裏ページに追いやられた女性作家の一人」と表現している。その後フェミニスト批評家たちによるLarsen作品の再解釈、再評価が進み、近年では、Thadious M. Davis、George Hutchinsonのような伝記作家のおかげでLarsenの生い立ちが明らかになってきている。本発表では、これまでの批評を踏まえ、Nella LarsenのQuicksand(1928)における人種の政治性の問題、アイデンティティの問題、他者からの表象問題を扱い、いかにLarsenがアメリカ社会に対してレジスタンスを示しているかを考察する。第一部では、LarsenがNegro Art ExhibitionやWriters' League Against Lynchingに参加したことに触れ、Larsenの政治的、社会的問題への興味を示す。さらにLarsenの社会への興味はQuicksandにも見受けられる。主人公Helga Craneは、Naxosにある閉鎖的な黒人大学に漂う西洋的価値基準の枠組みから抜け出す手段として、服装や東洋的な装飾品を通して自己表現を行っている。第二部では、Helgaの地理的移動、自己のアイデンティティの模索、主にアメリカ社会からデンマーク

社会に移動した場面に焦点をあてる。タイトルの“quicksand”が意味する流動的イメージがこの作品全体に流れている。他者による表象をHelgaは否定し、作品を通して自己表象を試みている。またQuicksand批評でよく問題になるHelgaの人生の結末を再考する。

Water with Berriesにおけるジョージ・ラミングのキャラバンたち

風呂本惇子

名作古典の書き換えは珍しい手法ではないが、西欧文化の受容を強要されてきたカリブの作家たちには特別の意味をもつ。コロンブス以来この地域に被せられた食人行為のイメージを逆手にとり、彼らは西欧キャンオンを解体、吸収して自分のものに変える書き換えを「文学的カニバリズム」と呼ぶ。George LammingのWater with Berries(1971)はシェークスピアのThe Tempestのほころびに食い込み、書き込みと重ね書きの手法を通し、究極的には原作から大きく離れた別の物語に変容させたものである。文学批評の世界では、今でこそキャラバンは被抑圧者のシンボルとして機能しているが、The Tempestを「我らの現在を予言する作品」と言明し、キャラバンをカリブ人に同定した最初の書物はラミングのThe Pleasure of Exile(1960)である。これに呼応して、1960年代、セゼール(マルチニク)、ブラスウェイト(バルバドス)、レタマール(キューバ)などが続々と自身の作品を通して反帝国主義を叫ぶ「怒れるキャラバン」像を打ち出した。男性のディスコースが全盛のその時期に、ラミングがThe Tempestの中の、一度だけ言及されるが舞台に姿を見せず、名前も与えられていない「プロスペロの妻(ミランダの母)」の側の物語を書こうとしたことは、フェミニズムの流れを先取りした感覚として注目に値するが、結果はどうであろうか。主軸は1960年代のロンドンに集うカリブ出身の(キャラバンに相当する)画家ティートン、作曲家ロジャー、俳優デレクの挫折の人生で、ティートンと彼を庇護しようとする下宿の年老いた女主人(プロスペロ夫人に相当)との関係に、「帝国主義の後遺症」とラミングが見なす心理が丹念に描きこまれてゆく。結局ティートンは女主人を殺害するのだが、ラミングはあるインタビューでこの暴力を「彼女がプロスペロの役割を引き受けた報い」だとし、「帝国主義の後遺症」を断ち切るに必要なもの、と述べている。やはりラミングももう一人の闘争的キャラバンを生み出すことに終わったと言わざるをえない。

4月例会 2008年4月25日 キャンパスプラザ京都

Octavia E. ButlerのKindredにおける記憶と身体

平沼 公子

1979年に発表されたOctavia E. ButlerのKindredは、タイムトラベルという手法を用いて奴隷制という過去を扱った現代アメリカ黒人文学として、非常に評価の高い作品である。本作品の下敷きとなっているエピソードとして、公民権運動時代の作者自身の経験がある。アフリカ系アメリカ人の歴史を観念のみで理解し、抵抗しなかった自分達の先祖を恥じ、殺してしまいたいと発言した中産階級の黒人男子学生に対し、Butlerは彼が歴史を体内に感じていない、と反発した。そして、彼に実際に奴隷制を経験させてやりたいと思った。この思い出が下敷きとなり、1970年代アメリカに生きる黒人女性である主人公Edana Franklinがタイムトラベルにより南北戦争以前の南部に送り込まれるという物語が出来上がった。この執筆に関するエピソードをとってみても、Butlerが、民族の記憶を個人の実体験とはっきりと区別し、個人の身体を伴った実体験に重きを置いていることに注目できよう。本発表では、Kindredにおける主人公デイナの身体と記憶の表象を中心として、現代アメリカ黒人文学において重要なテーマである「奴隷制という過去との対峙」において、そこに身体性が織り込まれた場合、どのような可能性を示唆するのかということ考察した。具体的には、主人公の身体への暴力の描写、読み書きという行為、そして「Home」という概念の3つに焦点を当て、本作品における身体性の重要視のされ方について検討した。

ぞっとするような物語の予告——ゾラ・ニール・ハーストンの『彼らの目は神を見ていた』におけるモダンの黄昏を告げる鳥

田中 千晶

本発表では、ゾラ・ニール・ハーストンの『彼らの目は神を見ていた』の中の人間の言葉を話すハゲタカによる祝祭に注目した。この祝祭以降、作品の中には、ジェイニーが「死神」と交流を持ち、ジョーとティー・ケイクに呪いをかける物語が断片的に嵌め込まれている。ジェイニーの愛の物語、あるいは自我の探求の物語というこの作品へのこれまでの見方を根底から突き崩すこの呪いの物語を読み取ることによって、これまで説明することが難

しかたいくつかの描写が理解可能になる。しかし、その一方で、ジェイニーがティー・ケイクを心から愛する物語と、呪いをかけるほど憎む物語の共存は、作品の中に新たな矛盾や理解不可能な箇所を生み出し、読者はこの2つの物語の間で宙吊りにされる。そのために、この死神による呪いの物語はジェイニーの幻想に過ぎないのではないか、という見方もまた可能である。人間の言葉を話すことで、現実と異界を自在に行き来するハゲタカは、生と死、善と悪、愛と憎しみ、現前と不在、現実と幻想が混在するこのような空間の始まりを告げているといえる。以上の考察をもとに、本発表では、第1章の最後に書かれている“monstropolous”という語をこの作品の鍵となる語として位置づけた。死神による呪いの物語は、作品の中に、それが本当にいるのかどうかさえもわからない、「ぞっとするような」女性、「怪物のような」女性としてのジェイニーの像を次々と創り出す。その結果として、この作品には、魔術や呪術を周縁化したモダンの行き着く先に待ち受けていた、理性では理解不可能な、ぞっとするような物語もまた映し出されることになった。

会員からの投稿

2009年1月20日という日は アフリカ系アメリカ人にとってどういう意義があるか

須田 稔

TIME誌1月26日号が、黒人公民権運動の先導者たち7人に、オバマ大統領就任式を前にインタビュー記事を掲載。表紙はオバマ氏の少し斜めからの顔写真。文字は「合衆国の新大統領と彼を待ち受ける重荷 大いなる期待」。

就任式はキング牧師の日という祝日の翌日。キング牧師と親交のあった人たちのことば、それぞれに意味深い。

ジョン・ルイス(John Lewis)ジョージア州選出下院議員。「就任式で自制できるかどうか。舞台上に上がるけれど、「体外離脱体験」しないように平常心でいなくちゃ。大緑地帯を見晴るかしてワシントン・モニュメントを越え、45年前に立っていたリンカン記念堂を見やることのできればいい。投票権登録運動を組織する、自由乗車運動に参加する、座り込みをする、初めてここワシントンに来る、逮捕される、投獄される、殴られる、そういう体験のなかで、アフリカ系アメリカ人がいつか大統領に選ばれるなど、考えたことも夢想することもな

買ったですね。母には私が下院議員に選ばれた姿を見てもらえたけど、いま父も母も生きてくれたなら都おもいますよ。うれしくて誇らしくて、感謝したい気持ちになるでしょう。そして二人とも、あの闘い、やってきたこと、やろうとしたこと、その甲斐はあったのだと言うでしょう。」

アンドルー・ヤング(Andrew Young) グッドワークス・インターナショナル代表。「バラク・オバマが選ばれて、そりゃものすごく誇らしい気分ですが、希望が過大になるのが心配です。黒人社会に言い続けているのですが、オバマは一度たりと「Yes I can」とは言ってない、ずっと「Yes we can」と言ってきたんだ、忘れちゃいけないよとね。オバマは、この世の救世主だなんて思い上がったことはない。我々がなりうる最善のアメリカを表現し代弁し、そこへ導いてくれる希望が抱ける人物なんだ。唯の黒人じゃない。アフリカ系アジア系ラテン系ヨーロッパ人なんだ。つまり、地球市民で正真正銘のアメリカ人てこと。類別はお断り。片方の父親と祖父が黒人だから黒人大統領だなんて、片方の祖父が白人だから白人大統領というのと同じで意味ないことだ。彼は我々に必要な人物だし、誇りに思う。私が育ってきた人権剥奪や屈辱と人種差別主義を彼は体験していない。それは結構なことじゃないか。傷跡のないラベルを持っているというわけだ。」

クラレンス・B・ジョーンズ(Clarence B. Jones)スタンフォード大学客員研究員。「マーティン・ルーサー・キング二世のごく親しい助言者だった我々は、生きていうちにアフリカ系アメリカ人の大統領が出てくるなど思いもしなかったよ、当たり前だろうね。バラクのことより、この国を想うとね。いや、バラク・オバマの卓越した業績とか功績を軽く見るわけじゃない。バラク・オバマのことを思いマーティン・キングのことを思うと、マーティンが言い方をあれこれ変えたがよく使ったヴィクトール・ユーゴの言葉を思うんだ。「強大な軍隊の行進より力強いのは時宜を得たアイデアだ」。バラク・オバマは時宜を得たアメリカン・アイデアだと預言めかして言えるかもね。そこにこのアイデアの力があるんだ。」

アレサ・フランクリン(Aretha Franklin)就任式で歌唱する予定の歌手。「私が歌うって？うわー、大変な名誉ね。すごいことよね。思うんだけど、大抵の人、アフリカ系アメリカ人だけじゃなくてね、アメリカに何か変わって欲しい思っているのよね。オバマと政権が手がけなくちゃならない焦眉のこと、抵挡流れとか経済とか犯罪とかね、そういう問題に関してね。とてもうまくやるんじゃないかなあ。知的でIQの高い人たちがついてるじゃない。成せば成るよ。私はそう信じてる。」

ジェシー・ジャクソン師(The Rev. Jesse Jackson)レインボウPUSH連合の創設者・会長。「こう思うことがよくあるのだが、1955年8月28日にエメット・ティルがリンチされた。1963年8月28日、キング博士はワシントンで演説、黒人の苦境を超えて黒人の夢を語り、2008年8月28日、バラク・オバマが民主党の大統領候補に指名される。就任式は変革の刻。宣誓はまだだが、挑戦はすでに始まっているんだ。」

ジェームズ・ローソン(James Lawson)神学者でヴァンダービルト大学の著名教授。「経済的搾取・強欲・性差別・暴力・人種差別主義。こういうものの力を我々のあいだでなお廃絶していない。オバマは変化の刻が来たと言うが、人民を抑えて拷問と残忍を創り出している社会経済的・政治的な力と取り組まなければ、この社会は全ての人びとに自由と平等と正義がある社会でなければならないとキングが理解した地点に前進したことにはならないのです。」

ジュリアン・ボンド(Julian Bond)NAACP=全国有色人向上協会・議長。「NAACPが100年間やってきた活動が、いま夢にも思わなかった成果を实らせたということ。我々は、なにも黒人をアメリカ合衆国大統領にしようと活動してきたのではない。自然な流れの結果なのだ。彼の人種よりは彼の政見が大事なのだ。過去からの急激な変化を体現したのだ。過去の8年間を振り返り、前を見てご覧なさい。文字通り、夜と昼ですね。」

(立命館大学名誉教授)

2009. 4. 4. ウォール街行進

須田 稔

この日、4月4日。キング博士とその1967年4月4日の「ヴェトナムを超えて」演説を記念して、「平和と正義をめざす連合」主催の行進がおこなわれた。イラクとアフガニスタンでのアメリカの戦争に抗議し、地域社会の必要に即する資金導入を要求する行動であった。労働者・退役軍人・学生・移民の権利保護を求めるグループ・兵士の家族・信徒・女性団体・地域団体など1万人がウォール街を行進した。

行進開始に先立って。ジェームズ・ローソン師が演説した。「キング博士の精神と、50年代60年代の平等と正義を求めた運動の精神を体して言いますが、平和を開花させるには、貧困・人種主義・性差別主義・暴力・強欲を根絶しなければならないのです。平和を叫ぶだけでは平和は来ないのです。平和は正義が実現して初めて出現するのです。」

ローソン師は、9000万人の勤労アメリカ人が毎日、「貧困の中を浮遊している」と歎き、「経済を活性化する最大の起動力は、この9000万人が自分と家族の生活を維持できるだけの賃金を受け取ることであり、これ以上に爆発的な刺戟はないだろう」と語った。

ローソン師はデモ隊列の先頭を歩いた。連邦準備制度理事会のビルの前を通り、ニューヨーク証券取引所を囲んだ。

以上は、4月7日着信のUFPJのメールの一部。キング牧師が「ヴェトナムを超えて」のなかで、「今日の世界で暴力の最大の調達人である、わたし自身のアメリカ政府」と述べていたことに、もっと注目すべきなのだ。63年の「わたしには夢がある」演説がオバマ大統領の出現で45年を経て現実味を帯びたが、軍事超大国は貧困と格差の極大化と世界経済恐慌の震源地であることが知れたいま、日本人民の世界平和実現の責務も厳しく問われているだろう。

(立命館大学名誉教授)

エスニシティーやジェンダーでなく真実で打ち立てよう 同盟は——作家・詩人アリス・ウォーカーがバラク・オバマに寄せる思い——

須田 稔

メキシコで長期滞在して帰国したのですが、大統領選挙戦、とりわけ民主党指名をめぐるオバマ vs クリントンの争いのせいで、古い国と並んで新しい国が存在しているのに気付いたのです。私たちは集団としては、「三方位の女神」になっていて、過去を顧みる、いまの居場所の自分を観る、そして未来を瞥見することもできますね。この国はわたしの馴染み深い空間です。

1944年にわたしが生まれたとき、両親はジョージア中部のプランテーションで暮らしていました。遠縁になる白人のミス・メイ・montgomeryが所有主でした。(わたしが子どものころは、白人の女の子は12歳になると「ミス」付で呼ばなくてはなりませんでした)。彼女はもちろん、この姻戚関係を茶化すことはしても許しませんでした。わたしの両親から彼女の子どもたちで鶏肉を食べたがらない子がいると聞かされて、もちろんだわよ、montgomery家の者なら誰だって食べないね、と返したのです。

両親と上の子どもたちは、ミス・メイのために思い及ぶかぎりのことをしてあげたのです。棉花と玉蜀黍を植えては育て、家畜に餌をやり、つぶして加工処理する、家の塗装、屋根葺き、搾乳場の管理、それに、数え切れないほどの義務と責任に加えて、彼女の運転手も

やる、昼夜分かたず彼女が行きたいとき行きたい場所へ運ぶ仕事も。彼女が暮らすのはシャッターが緑の白い大邸宅、緑の潤沢な芝生があって、『風と共に去りぬ』のタラほどではないけれど、同じ様式の屋敷。

私たちは、掘っ立て小屋、電気も水道もなし、さび付いたトタン屋根で雨風は遠慮なし、というみじめさ。ミス・メイは学校に通っていました。

わたしの両親や近隣の人たちが私たちのために建ててくれた学校は、競争相手の小作農を無学文盲にしておきたいという人種差別主義者の手で放火されて灰燼に帰しました。大恐慌のあいだ、父は家族を養うのに必死でしたから、1ヵ月10ドルを12ドルに上げて欲しいと頼みこんだのです。ミス・メイの返事は、白人にだってそれだけ払うつもりはない、ニガーになんかもちろん、というのでした。それだけの大金をニガーに出すくらいなら自分で乳搾りするよ、と言ったんですね。

過去を思い出して目にうかぶことに、白人のこどもたちを乗せたスクールバスが、学校まで5マイルの道をとぼとぼ歩くわたしや兄たちの横を追い越して行く状景があります。後年、白人生徒たちは煉瓦造りの校舎にいるのに、わたしの両親が廃棄処分になった兵舎をなんとか校舎にしようと苦勞していた姿も。わたしたちには本がありません。黒人の子どもは入らせてもらえなかった白人専用の学校で「ジェーン」や「ディック」が使っていなくなった「お古」を使ったのでした。

50歳になった時ですね、親戚の一人から聞いたのです、わたしの故里の町の図書館で子どもたちにわたしの本の読み聞かせを始めた。そういう場があるなんて想いもしなかった。だって、図書館なんて黒人には縁遠い存在でしたから。こども時分は公立図書館はわたしにいてほしくない所でしたし、そう今日まで思っているものですから、図書館はとても居心地悪い場所で、建設とか修理とか改装の支援、あるいは開設のための募金活動以外で入ることは滅多にないでしょうね。

20代の初め、ミシシッピーで自由を求める運動に参加したとき、両親たち苅分け小作人が永年馴染んできた土地、つまりプランテーションから追い出されたの、「民主的な」投票権を行使しようとしたからという理由で、その人たちの力になろうと参加したのね。わたしやほかの黒人への対応ぶりで、白人女性は男たちよりずっとましだったと言いたいところだけどダメ。そのころも今も思うんだけど、白人女性は父親や男兄弟の振る舞いをそっくり見様見真似してきたのよ。南部、特にミシシッピーがひどかったけど、その前にジョージアで投票権登録運動したとき、それ以前からだけど、割ったビンを頭に投げつけられることでは、ジェンダー・フリーだったわ。

大学生になって初めて白人女性の友達が何人かできた。わたしを愛してくれたし、友情の絆は堅かった。でも、わたしも彼女たちも理解していたけど、彼女たちは白人で白いことが大事なんだって。例えば、サラ・ローレンス大学、わたし卒業して直ぐ理事会に就任した

んだけど、会議には列車・地下鉄・徒歩でキャンパスへいくでしょ。けれど、他の理事は男女みんな白人で、大学のリムジンで行くのね。この国では、言葉に尽くせぬ痛苦の歴史が会って、この例は白いということがどういう意味かの一例です。わたしが大学にとって大事な人間なんだという気持ちになってもらおうと努めてくれたから好感をもっていたけど、わたしは貧乏だったからそういう気分にはなれなかった。

わたしはオバマ支持者。いまこの国を導くまともな人だと信じるから。この国と世界が取りかかって少しでも良いことをする、またとない機会を作ってくれてるから。フェミニストで白人の女友達の多くが彼を見る目がないのは、わたし、とつても悲しい。彼の生き方の中に彼が備えているものが見えてないのね。彼が提起している「運動」への新鮮な選択肢が耳に入らないのね。何百万というアメリカ人、黒人・白人・黄色人・赤色人・褐色人、がクリントンよりオバマを選ぶのは彼が男で黒人だからと彼女たちが思い込めることが、わたしには悲劇的に感じられるの。

わたしが白人を、男であれ女であれ支持してきた場合というのは、仕事に必要な事を最善にやれる人だと思ったからなの。それ以外は何もなし。オバマが可もなく不可もない人物なら、今頃は忘れられていますよ。オバマは、事実、注目に値する人物です、完璧ではないけれど人間的に瞠目すべき人物。キングやマンデラのように。彼を見るわたしたちの目つきはキングやマンデラを見る目つきと同じなの。同じ種族だという喜びネ。アメリカが必死になって何世紀ものあいだ隠そう、無視しよう、殺そうとしてきた変化を体現してるのよ。アメリカが白い自己以外の人びとの事も気にかけているのだと世界に思ってもらおうつもりなら、必ず果たさなくちゃならない変化をね。

わたしの内なる「三方位の女神」に忠実たらんとすると、オバマの見解には何でも賛成という事ではないのです。わたしと彼は大事な問題で意見が違います。わたしが年上だからか、女だからか、三つの肌色、アフリカ系と先住民系とヨーロッパ系が混じっているからか。わたしが生まれ育ったのはアメリカの南部。64年を生きてきて地球の人びとを見ると、苦悶する姿を見たいと思う人なんか一人もいません、わたしなり他のだれかに何をしてきたかはどうでもよいのです。もちろん、わたしは理解していますよ、人が成長するときの苦悶の在処のことは。

例えばキューバ、わたしが愛する国だし人民ですが、この国に対しては成熟した態度で接してほしいのです。通商停止はやめてほしいのです。わたしの友人やその子どもたちを苦しめてきました。キューバを訪れると、わたしにキスしてもらおうと信頼しきって顔をあげる子どもたちなのよ。恩師ハワード・ジン先生のお考えに同意するのですが、戦争は人肉嗜食や奴隷制度と同じく反対すべきことで、生活を良くする手段としては時代遅れもいところ。進行中の戦争は即刻止めてもらいたいし、兵士たちは勇気をふるって自分の武器を打ち壊しイラクから撤退して欲しい。イスラエル政府は、パレスチナ人に対する振る舞いを

きちんと説明してほしい。合衆国人民は今起きていることが理解出来ないと言っても言うように行動するのはやめてほしい。

一切の植民地化、一切の占領、一切の弾圧、だれが行っていても基本的には様相は同じ。現実から目をそむけているわけにはいかないのです。記録の中にあること、眼前にあること、これを調べ学び理解する私たちの能力に、私たちの未来はかかっているのです。だけど一番に思うのは、誰か自信のある人が、「敵」であれ「味方」であれ誰にでも語りかけてほしいの。で、このオバマという人はそれができるのよ。もう一人の人間に座って語りかけるのを怖がる人物に票を投じるなどは理解しがたいでしょ。投票するというのは、その人をあなたの代理人にすることなのです。つまり、あなたが発言出来ない時や場所で、その人は出来るということですね、だけど、あなたが票を入れた人が、彼と同じように人間に見える誰か他の人に語りかけるのが不可能だと思ったら、あなたの投票は無駄だったということではないかな？

ミセス・クリントン(自分だけの名前が使える程の自信をもってほしいものです)が「女性」、オバマが常に「黒人男性」を付加されているのを見てどう感じるかを語るのは難しいですね。彼女は無色で無人種で無過去の女と思う人もあるでしょうが、違いますよね。彼女はその内側にアメリカにおける白人女性らしさの全歴史を受け継いでいるのです。この事実と私たちが世界が何の反応もしないなら、奇蹟ですよ。彼女が人種的相続では潔白だと描きだす試みのなんというインチキサでしょう。

オバマが世界のどのリーダーとも、女性・男性・子どもとも、普通の人とも、膝詰めで、過去の使役とか人種の優越性などの邪魔物抜きで、語り合う姿は、わたしには楽に思い描けるのです。だけどミセス・クリントンだとどうでしょう。私たちの国と他の世界との接触を損ねてきた、白人の特権と他者の人生の現実からの隔絶というイメージを21世紀のアメリカ指導者にひきずるでしょうから、オバマと同じシナリオは思い描けないのですよ。

いえね、合衆国の女性大統領というのも素敵だわよ。下院議員のバーバラ・リーが良いわね。5年前、イラクへの戦争にただ一人反対したのよ。そういうのが、わたしの思う指導性、道徳性、勇気なの。彼女が白人であっても拍手喝采したでしょう。でも、彼女は立候補せず、ミセス・クリントンでしょ。ミセス・クリントンは女性だから、することも巧みだから、多くの人が、わたしの家族の若い女たちもだけど、初めはオバマより彼女が気に入っていたの。分かるわね。わたしの姪たちだけど、この国の有色人と貧困白人を今なお苦しめている土台にある不公正のことは、ほとんど記憶にないのね。

私たちの家族がここに住んでいるのは、大抵の北アメリカ人家族より長いんだけど、そして、私たちには先住アメリカ人の遺伝子がいっている事もあってだけど、投票権を手にしたのはごく最近、わたしの人生の出来事なのよ。数知れない人たちが、そのために苦労し死んでいった末のことよ。

何年も前になるけど、「ウーマニズム」という言葉を使ったとき、今日のような時代に、有色のフェミニスト女性として私たちが使う道具を私たちに提供するためでした。今は、合衆国の有色女性としての特異な道を、私たちは明確に見つめ献身的に讃えなければいけない時なのです。私たちは白人女性ではない。この真実は何世紀ものあいだ、しばしば残忍なやりかたで、私たちの内部に詰め込まれてきました。しかしまた、尊敬に値する勇気と知性と思いやりと資力を見せてくれないなら、男であれ女であれ黒人であっても、その人に臣従することはありません。バラク・オバマをこれほど多くの有色女性が支持していることに、わたしは欣喜雀躍、そして多くの白人老若男女の支持者を純真に誇らしく思うのです。

思ってもごらんないよ、彼が大統領に当選すれば、ホワイト・ハウスに黒人女性が3人もいることになるのよ。背の高い人が一人、小柄な人二人。その誰もが、洗濯物を持って裏口を出入りするなんてこともない。私たちに肝心要の事といえば、いま耐えている狂気と恐怖を生き延びるのに、いまよりはましな機会を誰となら持てるか、新しい可能性の旅立ちを誰と始めたいのか、ということでしょ。言い換えると、ホピ族の長老たちが言ったように、先に急流がある河をボートで行くとき、誰といつしよでいたい。とぼしい庭の収穫物と水を分かち合う最良の方法を誰が掴むのか。ホピの長老たちから助言をもらってるのよ、さまざまな災難があろうと、いまこの時を祝いなさいとね。

姉妹の皆さんたち、私たちは長い道のりを歩んできましたけど、いまは、この時代の挑戦に立ち向かうときです。挑戦の一つは、人種やエスニティーや肌の色や国籍、性的指向やジェンダーなどでなく、「真実」を根っこにする同盟を構築することです。私たちの旅を祝いましょう。目の当たりにしている奇蹟を喜びましょう。結末をいろいろ思い煩う事はよみましょう。たとえオバマが大統領になっても、この国の破滅はひどくて、再建の先導者となるのは彼の力量では及ばないかもしれません。けれど、もしも選ばれたら、私たちは個人としても集団としても、この惑星の市民として、彼が可能な最善の仕事をするのに力を貸さなくてはなりません。もっと言えば、彼がこのことを私たちに要請しているのだと言わなければなりません。私たちの母たちが困難な仕事を怖がってはいけないよと教えてくれたのは、恵みです。知って下さい、ホピの長老たちが断言するように、「河には流れる先がある」のです。そして記憶にとどめてください、詩人ジューン・ジョーダンとスウィート・ハニー・インザ・ロックが倦まずに言い続けた言葉、「私たちこそが私たちが待ち望んできた人間なのだ」という言葉を。

ナマステイ;
溢れる愛をこめて、

アリス・ウォーカー 北カリフォルニア カズル

春の第1日

["Lest We Forget : An open letter to my sisters who are brave " By Alice Walker / TheRoot.com March 27, 2008 を訳出したもの。]

アリス・ウォーカーがこれを公表してから1年以上、オバマが大統領に就任してから3か月以上が経った。彼女がオバマ当選を歓喜したであろう事は確かと推測するが、「チェンジ」が始動して、そのすべてに満足しているとは思えない。

彼女が「TRUTH」を土台にする同盟を築こうというとき、それは「真実」ないし「真理」だろうが、言葉を換えれば「公正と非暴力」、あるいは「人間の尊厳」ということだろうか。

いまの時点で彼女がオバマをどのように評価しているかを知りたいが、平和活動者として、主権者人民の不断の闘いこそが歴史を創造する原動力であると考えているだろうから、一喜一憂することはないだろう。

作家・詩人アリス・ウォーカーの大統領選挙とオバマに寄せていた想いの一端を記憶する価値は大いにあると考えて、ここに訳出した。

(立命館大学名誉教授)

リーズ便り

加藤 恒彦

皆さん、お元気ですか？私の方は、Leedsに到着してから1か月と少しが立ちましたが、元気にやっています。Leedsはイングランドの北部、ヨークシャーにあり、かつては織物業で栄えたところですが、70年代、80年代のイギリス産業の不振の時代を経て、サッチャー改革にうまく乗ったのでしょう、90年代から金融やショッピングセンターが中心の現在の活気のある小都市に生まれかわったそうです。リーズ大学はリーズ駅を背にするとその北西に位置していて歩いて20数分の近さです。僕の住んでいるのは市の郊外で、大学からバスで10数分のところにあります。大学の学生寮や研究者のための宿泊施設が混住しているBodington Hallという敷地で大学や市内に行くバスが敷地内の停留所まで来てくれて10数分ごとに運行しています。Hallには学生寮が10いくつあり、その周りには緑のサッカー・フィールドが何面もあります。私が住んでいるのは、教員用の部屋で、中庭に面した窓のあるリビング、寝室、キッチン、バスルームがあり快適です。インターネットもワイア

レスでアクセスできます。家賃が月五万円というのがありがたいです。大学とHallの間に大きなスーパーがあるので毎日買い物をしては自炊しています。

以上が生活のインフラ的なことですが、学会の近況報告なので大学や研究のことについて次に触れます。

そもそもリーズ大学に客員としてお世話になろうと思ったのには二つの理由がありました。ひとつは、John Mcleodという研究者との出会いです。彼とはキャロル・フィリップスが主催したイタリアのBelagio(2004年)でのカリブ文学の学会、ベルギーのUniversity of Liegeでのキャロル・フィリップスをテーマとする学会(2006年)で友達になり、人柄や学問的関心がぴったり合うことなどからLiegeでの学会のときから客員としての受け入れを依頼していました。彼には宿舍の斡旋、研究室の確保、図書カードやコンピュータのIDの取得、研究会やイベントの案内、教員への紹介、そして共通の関心についてのパブでのビールを飲みながらの議論など、これまでの客員の経験では考えられなかったほどお世話になっています。

また、University of Leedsはイギリスで、それまでのイギリス文学中心の英文の概念を拡大し、旧イギリス植民地圏(アフリカ、カリブ、インド・パキスタン、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド等)の英語で書かれたCommonwealth Literatureという新しい分野を開拓する役割を1960年代の中盤に果たしました。アフリカの作家グギやショインカも修士号をこの大学で60年代に取っています。そして今ではCommonwealth Literatureという概念の根底に残っていた伝統的イギリス文学中心主義を乗り越え、植民地時代の文献を批判的に読み抜くとともに、独立とともに新たに展開してきた多様な地域の多様な文学をその発展の歴史・社会文脈から理解するPostcolonial Literature研究のイギリスでの拠点の一つとなっています。英文学科として毎年250名、研究科として80名を受け入れる大きなところなのですが、教員も40名を超え、中世文学から現代まで各分野で活躍する第一線の研究者を誇っています(日本でいえば学科というより学部の規模です)。現代文学の分野でもオーストラリア・カナダ文学、南アジア文学(インド・パキスタン)、カリブ、アフリカ文学の文やで活躍する専門家がいます。

Johnはカリブやブラック・ブリティッシュの分野が専門です。彼はこの大学で90年代の初めに修士号を取得された東京女子大の溝口先生のお話によるとその当時博士課程の院生でスター的な位置にいたそうです。その後Lecturerとして採用され、2000年にはBEGINNING POSTCOLONIALISMをManchester大学出版から出し、よく売れている(同僚の先生が言っていました)らしく、第二版を近くだすそうです。私も昨日読み終えたのですが、Commonwealth LiteratureからPostcolonial Literatureへの研究視点の移行からPostcolonialismの主要な理論家(Said, Fanon, Homi Bhabha, Spivak, Gilroy)の理論や新たな問題領域の展開過程(英文学そのものの見直し、「第一世界フェミニズム

vs第三世界フェミニズム」等)を学生や院生にもわかりやすく、かつ論点を鮮明にしつつ書いています。また、2004年にはPOSTCOLONIAL LONDON: REWRITING THE METROPOLIS, Routledgeを出しています。これはロンドンをキーワードに第二次大戦から今日に至るブラック・ブリティッシュ文学の展開を分析したもので、まだ全部は読んでいませんが、膨大な作家を読みこなして書かれたものですので、まだ読んでいない作家や作品が沢山ある私にとっては非常に役に立ちそうです。図書館が非常に充実しているので、めぼしいものが見つければすぐ借り、アマゾンで買えば本をイギリスから郵送する必要もありません。

今年の夏にリーズに来た時にJohnはキャロル・フィリップスとナイポールが大好きな作家だと言っていましたので、この非常に対照的な作家を好きだという意味を私なりに理解しようと思い、行く前からナイポールの作品で気になっていた作品をいくつか読み始めていたのですが、さっそく、彼から二人の関係について書いた論文をもらい、この問題について議論を始めました。これがリーズでの研究の始まりとなり、その後、色々読み漁っています。書くのは日本に帰ってからにするつもりです。

ところで、キャロル・フィリップスが新しい小説(In the Falling Snow, Random House)を刊行します。5月14日にロンドンで公開のインタビューがあるのですが、Johnがインタビューアーです。私も一緒にゆくことになっています。新作はまだ刊行されていないので、その前の段階の校正版を彼は読んでいたのですが、それを貸してもらって読んでいたらフィリップスがもう一部送ってくれました。会うと色々新作について議論しています。現在のロンドンで人種問題について政策を立案する立場にいる自治体の中間管理職の黒人の私生活における様々な問題を描いた物語なのですが、これまでの作品との関係や現在の人種問題の状況などについて色々考える機会になればと思っています。

それとの関連でいうと、リーズにはChapeltonというところがあります。カリブ、インド・パキスタン系の移民が住みついた市内から少し離れたところにある地域で若者の失業率や犯罪・売春の多い地域としてInner-cityと呼ばれていますが、アメリカのそれとは違って住民の40%は白人であり、カリブ系の移民を中心にして活発なコミュニティの政治活動が50年代末からあったところで、カリブでの独立運動の経験やアメリカでの公民権運動の理念を受け継いだ運動を軸にしつつ、70年代に入り、ブラック・パワー・ムーブメントやラスタファリアニズムの影響を強く受けた運動があり81年には人種暴動がイギリス全土と呼応して起こり、その後、市政を担当していた労働党のイニシャチブでこの地域の改善が住民との協議を通じて行われました。その結果、この地域の多様な住民の社会変化にむけた団結という運動の側の理念とは裏腹に、各エスニック・グループの独自の宗教や習慣を守るという特殊化や(特にラシュディー事件でイスラム教への「攻撃」に反発したパキスタン系のイスラム)、個人として色々な施策を利用し、個人として成功してゆく形が生まれてきたと分

析しています。その意味でChapeltownはイギリス全土で起きてきた移民への差別や劣悪な条件を改善する全国的動向の到達点を縮図的に示しているのかも知れません。実は、昨年夏に来た時にMax Farrarという社会学者を紹介してもらいました。彼は白人の研究者ですがリーズ大学の学生の時からChapeltownに住みつき、住民の政治活動に参加し、この間のこの地域での大きな変化を生きてきたラディカルな活動家でもあります。それだけでなく、彼は自分の体験をもとに社会学のケーススタディとしてこの地域の現在までの歴史を博士論文としてまとめたのです。今回彼と再会し、Chapeltownに連れて行ってもらうことになっていますが、そのためにも本になっている彼の博士論文(The Struggle for 'Community' in a British Multi-Ethnic Inner-City Area, 2002)を読んでおく必要があると思います、図書館から借りて早速読みました。Stuart Hallが序文で高く評価したコメントをしています。私も読んで感心しました。今週彼と会うことになっていますが、色々聞きたいことがあって楽しみにしています。先日、リーズで開業しているユダヤ系の医師の自宅(京都の友人の兄弟)に夕食に招待されたのですが、Chapeltownの診療所で診療活動をしているそうで夏にはカーニバルに家族連れで行くそうです。そういえば、上記の本にもこの地域は移民が移り住む前にはユダヤ系の居住地であったと書いてありました。

(立命館大
学教授)

新 入 会 員

大上 茉莉(おおうえ まり)氏

自己紹介：岡山大学の大学院に在籍しています。これまでマルコムXの思想を研究してきましたが、修士論文では特に彼のハーレムを基盤とした活動に注目して論じたいと考えています。それに関連して、特に公民権運動後の時期における、いわゆるアンダークラスのアフリカ系アメリカ人の状況や、ブラックパンサーなどのゲッターを基盤とした諸組織の取り組みについても関心があります。よろしく願いいたします。

会 員 消 息

風呂本 淳子 氏

翻訳: マリーズ・コンデ著 『風の巻く丘』(風呂本淳子・元木淳子・西井のぶ子、共訳 新水社、2008年12月刊行)を出版。

編集後記

オバマ氏の大統領就任以来数カ月、妻のミシェル・オバマ氏に対する報道に注目しています。史上初のアフリカン・アメリカンのファースト・レディであるだけでなく、法律の学位を持つ史上二人目のファースト・レディとしてヒラリー・クリントンとよく比較され、また揶揄の対象にもされていますが、ホホワイトハウスの「最高司令官」ではなく「最高ママ」になることを、オバマ政権での自らの役割と発言したとき、彼女の発言はアメリカ国民に非常に好意的に受け入れられた感があります。常に自分の母親としての立場を政策と結びつけて語ってきたヒラリーに対し、「自分には東館があれば十分だ」というミシェルの宣言は、ある意味で彼女の“アメリカ的”政治手腕をうかがわせるものではありませんが、ファッションや料理のセンス、「元ファッション・モデルの」某夫人と並んでも引けを取らない身長など、彼女をオバマ政権時代の女性のアイコンとして位置づけるメディア報道に、食傷気味の視聴者も多いのではないのでしょうか。ファースト・レディという「役割」にアメリカ市民の多くは内助の功、母親という「共和国の母」的イメージを今なお要求するのか、また、彼女を時代のアイコン化するメディアは、今なお(再び?)白人女性と黒人女性のステロタイプのイメージを生み出すことになるのか、ミシェル・オバマ氏「最高ママ」就任の今後の影響が気になります。

(時里 祐子)

<編集> 黒人研究会・編集部
〒603-8143 京都市北区小山上総町
大谷大学文学部・古川哲史研究室気付

<編集者> 時里祐子